

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01185

研究課題名(和文)地中海・ランペドゥーザ島の場所の記憶/場所の政治

研究課題名(英文) Memories of Place/Politics of Place at the Island of Lampedusa in the Mediterranean Sea

研究代表者

北川 眞也 (Kitagawa, Shinya)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10515448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、移民がたどり着く島として知られる地中海・ランペドゥーザ島の場所の政治に着目した。当初は多くの島民へのインタビューを通じて、ローカルな場所の記憶を明らかにすることで、この課題に取り組むつもりだったが、新型コロナウイルスのパンデミックのため、研究の目的や方法を大きく変更した。そこで批判地政学やロジスティクスなどの議論を通じてより広域スケールで展開される諸過程を分析し、そこから島の場所の政治において表現される文化的・社会的実践の意味を考察した。「周辺」化された島では、「中央」=国家に収まる従属的欲望が支配しつつも、地中海へと自身を開放するような自律的欲望、地理的想像力が形成されてもいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ランペドゥーザ島に焦点を当てた本研究は、きまって領土の周縁として認識される国境・境界の支配的な理解に再考を迫るという点において、学術的かつ社会的な意義があると考えられる。国境は単なる分割のラインではなく、逆説的にも、多方向からの様々な人やモノを、抗争を含む仕方で結びつける場所でもある。加えて、そうした過程で生じる場所の政治のなかに、また住民によるローカルな地理的・歴史的・文化的文脈を掘り起こす実践のなかに、国家と資本の論理に収斂することのない地理的想像力の生成を見出す本研究は、固定的・静態的にみえる既存の地理が、実際にはより複雑でたえず争われている過程を明らかにするという点でも意義があるだろう。

研究成果の概要(英文)：The research focused on a politics of place on the island of Lampedusa in the Mediterranean, known as the island where migrants from the south arrive. The original plan was to address this issue by uncovering and clarifying the local memories of the place in particular through interviews with many islanders. But, due to the pandemic of COVID-19, we changed the purpose and the method of research. Therefore, we analyzed various processes unfolding on a broader scale through the theories of critical geopolitics and logistics, and from there, examined the meanings of cultural and social practices expressed in the politics of place at Lampedusa. It became clear that while the desire to be subordinate to the "center" (the Italian state) was hegemonic in the island as "periphery", autonomous desires and geographical imaginations to open oneself to the sea, or, the Mediterranean, were being formed.

研究分野：人文地理学

キーワード：地中海 ランペドゥーザ島 場所の政治 移動性 境界 批判地政学 ロジスティクス 地理的想像力

## 1. 研究開始当初の背景

ここ30年ほどの間、イタリア最南端に位置するランペドゥーザ島は、アフリカとアジアから地中海を渡る移民たちがたどり着く島として知られてきた。それに伴い、この島は、英語圏の地理学および関連分野では、〈南〉から来る移民たちと、〈北〉のヨーロッパ大陸から来る国家やEU、国際人権団体、人権NGOなどが織りなす主権的・統治的権力とが衝突する「移民政治」の境界として広く認識され、また研究されるようになった。

しかし、この視座においては、イタリアやEUの「移民政治」の「背景」ないしは「舞台」としてのみ、ランペドゥーザ島は設定されてしまい、島の社会や歴史、そして島民の生活に言及されることはほとんどない。実際、以前に実施したランペドゥーザ島でのフィールド調査時に、本土から多くのメディアが頻りに取材に来るが、そのほとんどは、島民ではなく、移民についての取材のためであるという島民の声を耳にした。しかも、こうした取材者は、島民の登場しない「ランペドゥーザ」と名をついた記事を書くことも多く、島民が登場したとしても、それは離島の「慈悲深い」人たち、あるいは「移民のせいで苦しむ」人たちのような、非常に一枚岩な本土・中央・国家からの島民像を再生産するものであった。

この研究では、ランペドゥーザ島のローカルな歴史的な文脈と歴史的記憶を調査し、その今日の意味を踏まえた上で、決して一枚岩ではない島民の場所をめぐる政治の動態を明らかにしようとした。それを通じてはじめて、現在の移民に対する、そして国家によって境界化されることに対する、島民の様々な態度にはじめて接近できると考えた。

## 2. 研究の目的

ランペドゥーザ島民は、この30年の間に、様々な言説を生産し、大小様々な行動を起こしてきた。ときに移民の受け入れに傾き、ときに排除する方向へ傾く。ときに中央政府の介入を求め、ときに介入を拒む。この揺れ動く島民たちの態度や行動を把握する上で、「人道主義」や「排外主義」といったいわゆる「移民政治」において一般的に用いられる用語を通して考えることは当然重要であろう。しかし、この文脈からのみ島民たちの意見や行動へと接近することは、この離島に生きる島民たちの様々な日常や生活上の問題などを見落としてしまうことにもなりうる。

本土・中央政府・国家の目線に立つのではなく、島のローカルな歴史的・地理的・政治的文脈に内在したときに、矛盾もするし対立もする様々な島民たちの態度にある種の論理が潜んでいることがみえてくるのではないかと考えた。その際この研究では、中心-周辺関係が島の社会的・経済的・政治的あり方や、島民の感情や表現を深く規定してきたのではないかと仮定した。経済的・政治的意味で用いられることも多い中心-周辺関係であるが、ここでは特に、島民の欲望、言説、行動を規定する文化的・政治的関係としてそれを理解しようとした。それはポストコロニアル研究などにおいて、「不十分な周辺」が「完成された(理想化された)中心」を欲望する／させられる関係性として論じられてきたものでもある。

それゆえ当初は、本土から遠い離島たるランペドゥーザの過去の様々な文化的・社会的・政治的行動、日常生活の記憶を、インタビュー調査を通して浮かび上がらせることを目的とした。そして、現在の「移民政治」をめぐるランペドゥーザ島民の矛盾含みの言説や行動を、このローカルな歴史的視座に内在して語り直すことを目指した。

しかしながら、上記の目的は新型コロナウイルスのパンデミックにより、大きく変更せざるを得なかった。特にインタビュー調査を通じた歴史的記憶の研究は困難となった。それゆえ、ランペドゥーザ島の位置を、批判地政学、ロジスティクス、インフラストラクチャー、惑星都市化などをめぐる昨今の理論的展開のなかで詳細に検討し、そこからローカルな場所の政治、そしてそこにおいて生成する地理的想像力を考察していくことへと研究の目的を修正した。

## 3. 研究の方法

上記の通り、毎年の現地調査において、数多くの島民にインタビューを行うことを研究方法の基盤に据えていた。しかし、現地調査が不可能となったゆえに、島の知人へのオンライン・インタビューを皮切りにインタビューを進めることも検討もした。だがオンラインでは、本研究の当初の目的に見合うほど、数多くの島民へのインタビューを十分に行うことは難しいと判断した。特にそれは信頼関係の形成という点、そしてインタビュー内容を充実させる困難という点においてである。また5年間の計画を、2年ほどで行うことは不可能だった。

それに伴い、ローカルな場所の記憶のインタビューを中心とした調査から、既存のデータや新たなウェブ上の資料の分析を中心とした調査へと変更し、そこから考察できるローカルな場所の政治のなかに、中心-周辺関係には還元されない表現や欲望を見出そうとした。

## 4. 研究成果

研究期間全体を振り返ると、上記の理由から当初の研究計画・目的を大幅に変更したため、ランペドゥーザ島の場所の記憶をめぐる研究を達成したとは言えないが、変更後の場所の政治をめぐる課題については、それなりに達成できたと考える。

(1)シチリア島よりアフリカ大陸に近いランペドゥーザ島は、イタリア統一以来、「周辺」としての役割をあてがわれてきた。今や観光地として知られる島ではあるが、社会的インフラが十分に整っているとはとても言えない。病院がないため、島では出産もできないし、手術もできない。救急の場合、人はヘリコプターでシチリア島の病院まで運ばれる。このような周辺の離島に、地中海を移動する〈南〉からの移民、地中海で「救助」された〈南〉からの移民がたどり着く。そして、応急手当て、一時的救護を受けるとされる。

このような場合、中央・国家の関心が島民ではなく移民へと向き、移民関連のことに税金が使われることで、島民は移民に否定的な感情を持ち、ときに排外主義的意見を持ち、ときにそのような行動を表現するに至る、ときまってみられる。実際、移民排斥を唱える政党・北部同盟(現、同盟)の政治家にすらなった島民がランペドゥーザ島にはいる。

しかし、この島民が排外主義的な政党へと同一化するようになったのは、上記のような文脈だけではないことが明らかとなった。親しい友人が救急ヘリコプターのなかで死亡したことに憤ったこの島民は、離島生活の困難と不安定性を説明し、その改善を求める手紙を、イタリアのすべての政党へと送った。その結果、北部同盟だけが返事をくれたのであり、それゆえに移民排斥の政党と接近することとなった。

ここから、人が人種主義に取り憑かれる回路の複数性が指摘できる。移民排斥の主張に同意するから、あらかじめ移民排斥の考えを持つから、人は人種主義者になるという単純な回路があるだけではない。一見それとは関わらないような、社会生活や社会的文脈からも人種主義は生み出される。つまり、移民拒否や排斥の感情、そして人種主義が広がる理由や過程を分析するには、地理や場所といった特定のローカル文脈への視点が不可欠だということである(北川 2024)。これは、既存の研究に対して、人間がそこで生きる地理的・社会的文脈を考慮することの重要性と、場所の政治を検討する必要性を示唆している。

(2)ランペドゥーザの島民からは、「ここはイタリアではない」といった言葉が聞かれることもある。しかしこの言葉は、「中心・中央」に対する強い期待と欲望の裏返しでもありうる。なぜなら、「ここはイタリアだ」という主張も、それと同じくらい頻繁になされるからである。たとえば、地中海を渡る移民たちの島への流入が増えれば、「我々はイタリア国民である。国家はすぐに介入せよ」という国家への欲望、国家による救済の欲望が表出するからである。「周辺」の島であるがゆえに、逆説的なことに、「中心」への従属的な欲望が生起してしまう。

しかし、数人の島民たちがつくる集団「アスカーブサ」の文化的・政治的活動からは、この国家へと向かう欲望を断ち切ろうとするような表現が見出される。この集団で重要な役割を担う島民は、忘却されるランペドゥーザ島の歴史的文化・民俗・音楽を掘り起こす活動を行うなかで、この島が地中海という海へと開かれてきたことを見出し、それを現在へと手繰り寄せようとする。ランペドゥーザ島はイタリア国家やヨーロッパの「周辺」ではなく、地中海の数多の中心のひとつなのである。

だが、この国家の「中心」へと吸収されないこの地理的想像力だけで、ただちに〈南〉からの移民に対するネガティブな感情が消えるわけではない。ここでこの島民は、ランペドゥーザ島の緯度がチュニスの南にあることを強調し、そこから比喩的かつ現実的に、ランペドゥーザ島は地中海の〈北〉(の周辺)ではなく、地中海の〈南〉に位置しているのだと述べる。地中海を裁断する植民地主義の歴史と現在を踏まえたとき、ランペドゥーザは、まるで地中海の南岸の土地のように、〈北〉からの植民地主義的権力によって包囲され、いかなる自己決定権も奪われてきたのだという。

ただし、これはランペドゥーザ島とアフリカに対する〈北〉による植民地化の過程が同じものだというのではない。むしろそれは、〈北〉の周辺から〈南〉の方向へとランペドゥーザを開放することで、周辺化されてきたランペドゥーザ島に根ざした特異な社会闘争と、略奪される〈南〉からランペドゥーザへとやってくる移民たちの特異な闘争とを結びつけ、互いに翻訳し合うような地理的想像力、既存の国家と植民地主義による分割に対する対抗的な地理的想像力であるとも言えよう。

ここでも、やはりランペドゥーザのローカルな文脈が重要となる。アスカーブサの島民たちは、移民への人道的な支援であれ連帯であれ、いわゆる第一に「移民政治」に取り組んでいるわけではないし、「移民政治」の言葉で物事を考えているわけではない。生活する土地から遊離した無色透明な存在として移民への責任、移民の受け入れに取り組むわけでもない。既存の批判的移民研究や移民の移動を扱う地理学研究が注目する移民支援団体や移民連帯の社会運動とは異なり、かれらはまず、そしてあくまでも自分たちが生きる場所の政治に従事する。過去へと文化的に遡りながら、現在の島の社会的問題へと向かうとき、その想像力、その実践は、おのずと〈南〉へと、移民の移動へと接続されるのである(北川 2024)。既存の国家的な地理的想像力を温存した移民の「受け入れ」という問題系には限られない、境界横断的でありながらも、場所や土地に密接に結びついたかたちで展開される対抗的な地理的想像力、そして政治的実践の可能性と重要性を指摘することができる。

(3)ランペドゥーザ島は、確かに国境・境界である。この場合、国境・境界は〈北〉と〈南〉を分割する、切り離すラインとして認識されるだろう。しかし、国境・境界は分離と同時に、接続の装置でもある。なぜならランペドゥーザ島は、〈南〉からの移民たち、島民たち、そして〈北〉

からかれらを統治すべくやってくる数々の集団（警察、軍隊、国際人権団体など）、報道関係者、観光客、研究者などの多様な人びとが集まる「場所」となっているからである。一見逆説的なことに、国境・境界は、様々な人たちが集まり、諸関係を形成する「場所」となっている。

無論、国境・境界は分離のラインでもあるが、同時に相異なる利害や関心を持った種々の主体が集まる場所でもある。ここからラインとして認識される国境・境界においても、その働きを明らかにするには、場所という概念、そして場所の政治への視座がやはり重要であることが指摘できる。

しかし、国境・境界に集まるのは、人間だけではない。移民を管理する収容施設、移民の移動手段などのモノもまた集まる。さらには海や砂漠などの自然環境などの、非人間もまた国境・境界を構成するのである（北川 2023）。

ランペドゥーザ島には、移民たちが乗ってくる船や、船のなかに残されたかれらの持ち物（飲み物、衣服、クーラー、聖書、救命胴衣、靴、写真、手紙など）といったモノもまた移動してきている。堆積する船は、燃やされることもあれば、地中海での移民の「悲劇」の象徴とされることもある。また、北川（2018）ですでに言及した内容ではあるが、アスカブサのメンバーは、船のなかに残されたモノを集め、自身の活動スペースに「展示」してきた。かれらにとって、この移動し堆積するモノもまた、ランペドゥーザという場所を構成する存在であり、この島の歴史の一部なのである。

北川（2022）においては、こうした内容を振り返り、国境・境界の研究にとって、また場所の研究にとって、こうしたモノがもたらす政治の重要性を、理論の点においても、調査という点においても強調した。モノの移動、モノと人間の諸関係は、国境・境界の働き、そして場所の政治への理解を深める上で示唆的なものであろう。

(4) 基本的にランペドゥーザ島には、本土へと移送されるまでの間、移民たちは一時的に滞在する。それゆえ、かれらを収容するための空間が長らく設けられてきた。2015年に生じたいわゆる「欧州難民危機」に伴い、この収容施設はEUの影響のもとで「ホットスポット」という地位へと変更された。それは以前のように本土へと移動させてから詳細な身元確認を行うのではなく、ランペドゥーザ島のような南欧の国境にある島々において、すべての人びとの完全な身元確認を素早く実行するためであった。つまり、「経済移民」や「庇護希望者」などのカテゴリーにできるだけ人びとを素早く振り分けるということである。こうすることで、その先の処遇のために、次の場所への円滑な移送を可能とする移動手段と移動経路をより迅速に整えることを目指すものだった。

こうした動きは、批判的移民研究者らが指摘するように、移動管理のロジスティクス化であると言える。今日の資本主義のグローバルな展開において、ロジスティクスはその生産と流通を統括する極めて重要な合理性となっている。しかし、北川（2021, 2024）でも述べたように、それは商品の適切かつ円滑な移動の管理・監督だけに関わるものではない。このような人の移動、あるいは労働力商品の移動の管理にも、ロジスティクスの合理性はしだいに浸透しつつある。この場合、ランペドゥーザ島の収容空間は、移民たち、あるいはその移動の連なりを、適切なタイミングで、適切な速度で、適切な量で、適切に振り分け、次の適切な場所へと移動させるロジスティクス上のハブなのである。

しかも、資本のロジスティクスが商品を移動させることで経済的利益を得るのなら、それは移民を移動させるロジスティクスにおいても同様である。地中海の移民の移動の管理・監督に関わり、それに介入する様々なインフラが生産されると同時に、ランペドゥーザの移民収容所もそうであるが、移民をまるで郵便小包のように「運送」したり、「保管」したりすることで利益を得る主体が生み出されるようになる。

しかし、こうしたロジスティクスの「点と線」による円滑な移動の論理が、移民の抵抗や拒否によって掻き乱されることもある。さらには、ロジスティクスによって迂回されたり、宙吊りにされたりするはずの場所の「面的な論理」によって妨害されることもある。収容されるために島民と接点を持つことが簡単ではなかったランペドゥーザの状況においても、外に出てきた移民たちが島民たちと出会い、遭遇し、そこにおいて具体的な諸関係を形成することがみられた。島民から移民たちへの衣服や食料、毛布の提供から青空イタリア語教室、島民の新たな収容所建設反対運動への移民たちの合流などを通じて、両者の間に予期せぬつながりが生み出されてきたのである。

ロジスティクスが場所の間というより、点の間での迅速な移動と接続を突き詰める別種の移動空間を用意するとしても、それは素通りしたいはずの場所の論理、場所の政治によってその円滑な流れは遮断されたり、拒否されたりすることがある。このことは、商品および人の移動のロジスティクス研究にとって、ロジスティクスの移動空間が素通りしようとするが、そこに（不可避に）巻き込まれてもいる地理的・歴史的・社会的文脈、すなわち場所性を問い続けることの政治的重要性を示唆している。

〈文献〉

- ① 北川真也、アンチ・ジオポリティクス——資本と国家に抗う移動の地理学、青土社、2024
- ② 北川真也、国境・国境地域、地理学事典（公益社団法人日本地理学会編）、丸善出版、2023、612-613

- ③ 北川眞也、ランペドゥーザ島——モノが照射する境界化の政治、「政治」を地理学する——政治地理学の方法論（山崎孝史編）、ナカニシヤ出版、2022、217-231
- ④ 北川眞也、惑星都市化、インフラストラクチャー、ロジスティクスをめぐる 11 の地理的断章——逸脱と抗争に横切られる「まだら状」の大地、惑星都市理論（平田周、仙波希望編）、以文社、2021、103-151

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 北川真也	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 「社会の総寄せ場化」における労働移植のロジスティクス 外国人技能実習制度、移動の自律性、流動的下層労働者	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊経済理論	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒又美陽、大城直樹、渡邊隼、北川真也、原口剛、仙波希望、林凌、平田周、馬渡玲欧	4. 巻 90
2. 論文標題 現代都市を捉える理論的基盤の探究 『惑星都市理論』からその先へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北川真也	4. 巻 73(3)
2. 論文標題 2020年学界展望 学史・方法論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 264-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/jjhg.73.03_264	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北川真也、原口剛	4. 巻 1162
2. 論文標題 ロジスティクスによる空間の生産 インフラストラクチャー、労働、対抗ロジスティクス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 78-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北川眞也、箱田徹	4. 巻 1162
2. 論文標題 提起 採掘 - 採取、ロジスティクス 現代資本主義批判のために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 8-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木彰彦、山崎孝史、古川浩司、香川雄一、川久保文紀、北川眞也、岩下明裕	4. 巻 11
2. 論文標題 地政学ルネサンスを超えて 地理学と政治学の対話 ラウンドテーブル~ 『現代地政学事典』(丸善、2020年)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 境界研究	6. 最初と最後の頁 55-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 サンドロ・メッザードラ著、北川眞也、原口剛聞き手・訳	4. 巻 1162
2. 論文標題 インタビュー ロジスティクスと採掘主義、あるいは「釜ヶ崎=地中海的な空間」をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 100-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 サンドロ・メッザードラ著、箱田徹、北川眞也翻訳・編集	4. 巻 86
2. 論文標題 ヨーロッパの難民・移民と階級をどう見るか? - 境界研究の理論的視座	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 24-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 北川真也
2. 発表標題 包摂する境界という難問      メッザードラ + ニールソン 『方法としての境界』 から考察する資本主義と人種主義
3. 学会等名 第48回社会思想史学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 北川真也
2. 発表標題 ネグリ + ハート 『アセンブリ』 へのコメント2点
3. 学会等名 フーコー研究フォーラム、ネグリ = ハート 『アセンブリ』 書評会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shinya Kitagawa
2. 発表標題 Logistics and Counter-logistics in the Mediterranean
3. 学会等名 Globalization, ports and society (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 北川真也
2. 発表標題 移動・避難の自律性 / 政治性を考えるために      場所の開放性、境界の多数性、軌道空間の生産・領有、インフラ・ロジスティクス
3. 学会等名 第6回「移動と共生」研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 北川真也	4. 発行年 2024年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 538
3. 書名 アンチ・ジオポリティクス 資本と国家に抗う移動の地理学	

1. 著者名 ニダル・アブズルフ、金城美幸、北川真也、阿部小涼、保井啓志、中村一成、太田昌国、役重善洋、早尾貴紀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 208
3. 書名 交差するパレスチナ 新たな連帯のために	

1. 著者名 村山祐司、秋本弘章、一ノ瀬俊明、小口高、梶田真、鈴木康弘、箸本健二、松井圭介、松本淳、森島済、山本佳世子、David Sprague、相澤亮太郎、青木賢人、青木久、青山雅史、赤坂郁美、秋元菜摘、秋山千亜紀、秋山祐樹、北川真也	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 844
3. 書名 地理学事典	

1. 著者名 南山淳、前田幸男、五十嵐元道、大山貴稔、清水耕介、和田賢治、蓮井誠一郎、古澤嘉朗、原田太津男、柄谷利恵子、北川真也、小林誠	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 272
3. 書名 批判的安全保障論 アプローチとイシューを理解する	

1. 著者名 山崎孝史、麻生将、今野泰三、香川雄一、北川眞也、佐久眞沙也加、全ウンフィ、関村オリエ、高木彰彦、畠山輝雄、花松泰倫、福本拓、二村太郎、前田洋介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 242
3. 書名 「政治」を地理学する 政治地理学の方法論	

1. 著者名 平田周、仙波希望、荒又美陽、ニール・ブレナー、渡邊隼、北川眞也、原口剛、キー・マクファーレン、林凌、大城直樹、馬渡玲欧	4. 発行年 2021年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 456
3. 書名 惑星都市理論	

1. 著者名 田中ひかる、那須耕介、金子遊、山本明代、姜信子、斎藤真理子、寺尾紗穂、東琢磨、真島一郎、松尾隆佑、斉藤悦則、山本健三、竹内栄美子、大窪一志、中谷いずみ、内藤千珠子、海老原弘子、蔭木達也、大和田茂、足立元、北川眞也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 皓星社	5. 総ページ数 183
3. 書名 アナキズムを読む 自由 を生きるためのブックガイド	

1. 著者名 『現代地政学事典』編集委員会（北川眞也・編集委員担当）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 現代地政学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------